

「箕輪城下町と高崎城下町ーその成り立ちを探るー」

秋本太郎 (高崎市教育委員会文化財保護課)

1. 箕輪城下町の成り立ちと変遷

(1) 箕輪城築城以前の「箕輪」

- 鎌倉時代初期に成立し選定に鎌倉幕府が関わったとされる(齋藤 2008)
坂東三十三所の第15番が長谷寺、第16番が水澤寺。
- 箕輪城と榛名白川を挟んだ対岸の箕郷町富岡に「順礼道上・順礼道下」という小字が残り、長谷寺と水澤寺をつなぐ「巡礼みち」とされている(箕郷町 1975)。
- ➡このルートは坂東三十三所の成立年代をふまえると中世前半まで遡り、15世紀後半の享徳の乱の際にも使われるように中世を通じ重要なルート。
- 箕輪から善地・唐松を経て、地蔵峠を越えて榛名神社前へ出る道も中世に存在した可能性がある(榛名町 2011)。
- ➡箕輪に安国寺伝承地が存在し、周囲に古代山岳寺院や中世寺院が多く分布することから、築城以前の箕輪は古代山岳寺院に系譜を持つ中世寺院の中核的な地域と想定されている(飯森 1999)。

(2) 箕輪城築城以前の土地利用(西明屋法峯寺前遺跡の成果)

- 西明屋法峯寺前遺跡では中世の度重なる洪水の痕跡や掘立柱建物などが確認された(金子 2017)。調査結果を整理すると概略以下のようなになる。
- 大規模流路がある中世の古い段階→その流路が洪水である程度埋まり低地となり、耕地として利用する段階→掘立柱建物が建てられる段階(16世紀)→箕輪城の廃城(1598年)の頃に井戸を廃絶する段階
- 当初あった流路の延長上には、上町、本町、鍛冶町という小字が残り矢原宿とよばれている通りがある。
- ➡矢原宿の通りは中世の古い段階の流路を反映した地形の可能性があり、この流路跡の低地を集落ではなく耕地として利用しようとした段階がある。

(3) 寺社の分布から

- 高崎に移転した寺社の旧跡地が不明な寺社も多いが、一部で推測できるものもある（第1・2表・第3・4図）。
- 『高崎志』などの記述をもとにすると、妙福寺、安国寺、石上寺、八幡社、光徳寺は、長野氏時代にはすでに創建されていると記されている。
- この他、長野業政の頃に箕輪の田宿に移転したと『高崎志』などに記されている慈上寺を含め、これら寺社の分布は上ノ宿から現在の県道前橋箕郷線周辺に集中する。
- 箕輪城築城は出土遺物の動向から15世紀末以降と想定され（第2図）、築城と同時に、あるいは築城後にこうした寺社の整備が進んだと想定される。
➡上ノ宿は地形的に周囲に比べ一段高く、さらに安国寺の存在も考慮すると、長野氏時代、あるいはそれ以前から「箕輪」の中心的存在で、長野氏はそこから惣社城（蒼海城）の方向に延びる現在の県道前橋箕郷線沿いの整備を進めた。

(4) 直線的街区と井伊直政による整備

- 井伊直政創建とされる龍門寺が東明屋の直線的街区の起点。
➡東明屋の直線的街区は井伊氏による整備が想定され、東明屋の街区と軸がほぼ同じで、直線的な西明屋の「上町」、「本町」、「鍛冶町」、「連雀町」、「中町」、「田宿」を中心にした街区も同じ時期の整備と推定される。
- 西明屋は地名から考えると「連雀町」に代表される商人を中心とした町で、これらの東側に位置し、井野川沿いのやや低地部分を占める「白銀丁」、「紺屋町」、「鍛冶町」は、職人の居住地。
- 東明屋の直線的街区は商工人に関わる地名はなく、武家屋敷地であろう。

(5) 周辺城館の消長と箕輪城下町

- 箕輪城から南に4～5kmの浜川町周辺では、長野氏の本拠や長野氏家臣団の居館の伝承がある城館が多く分布（第7図）。
- 出土遺物を元にした遺跡の消長は第3表のようになる。これらは大きく以下の3パターンに分けられる
 - A：御風呂遺跡（I）ように14世紀から15世紀を中心に存続する遺跡
 - B：矢島遺跡、高田遺跡に代表され、寺ノ内遺跡もこの中に含まれるが、15世紀～16世紀中葉までが中心の遺跡
 - C：16世紀後半に途切れず16世紀末か17世紀前半まで継続する井出地区遺跡群、浜川高田遺跡などの遺跡

- ➡井伊直政の箕輪城下町整備とつなげて考えると、A→B→箕輪という大きな流れが想定され、16世紀末に箕輪城下への集住化が進んだといえる。
- ➡井伊直政は徳川家康家臣中、最大石高12万石で箕輪城城主になっている。箕輪城の普請を行っていることが史料に記されているとともに、発掘調査でも石垣や門の建築など城の改修を行っていることが明らかになっている。こうした城の整備と合わせて城下の整備を行い、その石高に相応しい城下町形成を行った。

(6) 箕輪城下町の変遷のまとめ

- 応永23年(1416)に「箕輪本郷」と記された文書があるが、この時の具体的な町の状況は不明である。いずれにしても「箕輪本郷」と表現され、坂東三十三所など宗教施設に関わるルート上の重要な結節点であったが、西明家法峯寺前遺跡の成果から、15世紀後半～16世紀前半までは低地部が耕地として利用されていた。
- 箕輪城築城、あるいは築城後、長野氏によって西明屋の上ノ宿や現在の県道前橋箕郷線周辺を中心に整備が始まった。
- 井伊直政の時期に龍門寺の創建と東明屋や西明屋の直線的な街路整備が行われた。周辺の城館跡の消長もふまえると、この城下町への集住が進み、12万石の城下町に相応しい形に変貌した。

II、高崎城下町の成り立ち

(1) 高崎城築城以前

- 高崎城築城以前は、和田氏の拠点である和田城が烏川沿いの台地上にあった。この和田城に関わる絵図が『和田城並びに興禅寺境内古絵図』である。この絵図は高崎城築城の際の絵図と推測されていた(大江1996)が、さらなる検討の結果、天文21(1552)年以前に描かれた絵図と結論付けられている(清水2013・2016)。この絵図を元に和田城周辺の土地利用の推定がされているのが第9図である。

(2) 高崎城築城

- 慶長2年(1597)に高崎城の縄張り普請が始まったとする史料もある(「布留山石上寺記」『箕郷町誌』所収)。
- 『高崎志』などを元にするると慶長3年(1598)に築城される。
- 和田城を取り込み、東側は拡張して築城。

(3) 城下町の整備

- 町の由来等は『高崎寿奈子』、『高崎志』に記され、それによると箕輪から移転した町は連雀町、田町、椿町（本町）、鞆町、新紺屋町、鍛冶町、本紺屋町、磬撃町。
 - 箕輪から移転、もしくは分寺した寺社は第1表のようにまとめられる。
 - 中山道沿いに町人地、1本西側の通り沿いには職人町が配置される。
 - 武家屋敷は、二の丸に藩主屋敷、三の丸に中級以上の武家屋敷や藩の公的施設、城下町内には下級藩士の組屋敷などが広がっている（高崎市 2006）。
 - 第3図の明治初頭の状況は、東明屋の大部分が耕地として描かれ、西明屋も連雀町の通りと矢原宿の通り以外は耕地になっている。こうした状況は江戸時代中期の絵図でも同様に描かれている。このことから箕輪の大部分が高崎に移ったことがうかがえる。
- ➡12 万石の領国の城・城下町として整備するため、箕輪からの移城・移転は大規模であった。こうした大規模移転の上に高崎城下町が成立し、その後江戸時代を通して中山道有数の町に発展していった。

参考・引用文献

- 秋本太郎 2009 「箕輪城跡の調査成果と今後の箕輪城跡」『箕輪城跡シンポジウム資料集』高崎市教育委員会
- 秋本太郎 2014 「上野箕輪城と城下町について」『守護所シンポジウム 2@ 清須 新・清須会議資料集』新・清須会議実行委員会
- 秋本太郎 2020 「城下町探訪③高崎城」『第102回企画展 空からグンマを見てみよう』群馬県立歴史博物館
- 飯森康広 1999 「室町・戦国期における上野国箕輪の変遷」『和田山天神前遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第254集（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大江正之 1996 「興禅寺境内古絵図」『新編高崎市史』資料編3 中世I 高崎市
- 金子智一 2017 「西明屋法峯寺前遺跡」『上和田遺跡・上並榎仲沖遺跡2・剣崎大塚南遺跡・西明屋法峯寺前遺跡・正観寺弁財遺跡』高崎市文化財調査報告書第388集 高崎市教育委員会
- 齋藤慎一 2008 「東国武士と中世坂東三十三所」『東国武士と中世寺院』高志書院
- 清水 豊 2013 『高崎城遺跡 20』高崎市文化財調査報告書第312集 高崎市教育委員会
- 清水 豊 2016 「和田城並びに興禅寺境内古絵図を読み解く」『群馬文化』第327号 群馬県地域文化研究協議会
- 高崎市 2006 『高崎城絵図－「櫻井一雄家文書」を中心に－』高崎市史資料集1
- 時枝 務 2002 「城下町高崎の都市プラン」『マチの生活と民俗の変化・商店・職人・町並み・生活』高崎市史民俗調査報告書第八集 高崎市
- 榛名町誌刊行委員会 2011 『榛名町誌』通史編上巻
- 箕輪町 1975 『箕輪町誌』